

構成や描写を工夫して書こう① 月 日 () 組 番 ()
 体験を基に随筆を書こう

○随筆の基になる体験について作文を書こう

① 題材を選ぼう
 () 「忘れられない風景」
 () 「忘れられない言葉」

② 材料を集めよう
 ・ 5W1H (教科書36ページ) いつ・誰が・どこで・何を・なぜ・どのように

5W1H
 When =いつ
 Who =誰が
 Where =どこで
 What =何を
 Why =なぜ
 How =どのように



いつ・・・ バスケの選手権
 誰が・・・ 友達か
 どこで・・・ 市民体育館
 何を・・・ 声をかけてくれた
 なぜ・・・ 2回戦で負け悔しくて
 任せてくれた時、最後の
 写真撮影をした。
 どのように・・・ 女中さんから
 背中をさす、笑っ
 くれた

・ マッピング (教科書271ページ)
 どんな風景か、どんな言葉か
 その風景、言葉が忘れられない理由 など



構成や描写を工夫して書こう② 月 日 () 組 番 ()
 体験を基に随筆を書こう

③ 作文を書こう

題材「忘れられない (言葉)」 *常体 *十行以上

小学生のバスケの選手権で、苦戦を共にしてきた親友の言葉が忘れられない。私は試合のスタメンとして出て、今までの練習を生かして自分のできる限りのことはした。でも負けてしまい、悔しくて悔しくて涙が止まらなかった。試合の最後には相手チーム、審判にあいさつをし、自分のチームのベンチに帰ってくる。負けた人やかなと実感した。そして最後の写真撮影をした。私は笑えなかった。そんな時、親友が、「最後は笑って終わろう」と言ってくれた。ああ、終わるんやな、なんて勝てんかったんやろ、自分もつらいはずなのに、私のことを気にかけてくれてありがとうと思った。そして、互いに泣きながら背中をさす、笑った。

「最後は笑って終わろう、冬の晴れやかな青天の日に思い出すのはこの言葉だ。ミニバスの選手権、ときどきする中、試合に出た。最後まで自分のベストを尽くし続けたが負けた。しんぼりとしたベンチ汗と涙がしみたミニチーム。」



随筆二編を読み味わおう

○印象に残った語句や表現に赤線を引き、下の枠に理由や感想を書こう

空

工藤 直子

北陸の山奥に住んだのは、小さい頃からの憧れであった雪のそばにいたかったせいかもしれない。二十数軒という小さな集落の中の空き家を借りて住んでいた。

最初の冬である。軒までの雪に埋もれて通っていたのだが、ある日、外に出ると、一面に小雪が舞っている。「一面の雪なのに、辺りが妙に明るい。なんか姿だなど、ふと空を見上げると――そこには、灰色の麗しい雲はなく、抜けるように青い空があった。

ああ、これが「風花」というものか！ 私は、雪を浴びながら空を見上げていた。深く濃い冬の青空が、真っ白な雪を生み出している。しかし思えない、後から後から、雪は見えない高みで生まれ、瞬間もなくひらひら・ひらひらと舞い下りてくるのである。目が回るようになった。雪の白さに引き立てられて、空の青さは、いよいよ濃い。私は、あんな美しい「青空」を見たことがなかった。

えんぼう

工藤 直子

忘れられない言葉群をたどってみると、最も古い記憶の中から現れるのは「えんぼう」という言葉だ。

四、五歳の頃、父と私だけで暮らす時期が二、三年あった。たった二人の日々である。仕事から帰った後の父、休日の父に、まとわりつき、家の中でも父の後をくっついて回った。

朝夕の日課である散歩の時間は、至福のひとつだった。のんびりとした父の気配に包まれて、安心していられたから。植物姿の父の足もとや、差し出してくれた人さし指を、鞆のつり革のよう口にぎりしめていけば、何も怖いものはなかった。

小学校の校長をしていた父は、学校間の会議などがあるらしく、時々、日帰りの出張などしていた。家の中でも、くっついて回る私である。出張の日の父の気配の違いを見逃さない。

そんな日の父は、透明な膜に包まれている。そしてナフタリンの匂いがする洋服を、きちんと替始める。私は息がせわしくなると、必ず同じ質問をする。

「父ちゃん、どこ行くの？」

父も必ず同じ答えを返す。「えんぼう、えんぼう」。天井を眺めながら、歌うように「エンポーエンポー」と繰り返す父の姿はまぶしく、非日常的であり、私は、連れて行ってもらえない「えんぼう」というところに、深く深く憧れた。そしてその、まぶしい輝れやが「えんぼう」に、いつか必ず行きたいと思っていた。

一面の青

理由 真っ白な雪

景色を想像できるから。

抜けるようにまぶしい空

理由 雲のない青空

理由 空の青さは

いよいよ濃い

理由 青さが伝わる

表現だから

理由 あんな美しい

理由 青空を見たことが

なかった

理由 かもしれない

理由 至福のひとつ

理由 本心に素直な

理由 の大なと思える

理由 表現だから

理由 んがかりした父の

理由 気配に包まれて

理由 優しいや、のんびり

理由 さか伝わっている

理由 まぶしい晴れやかな

理由 理由 あみだかいたる

理由 からさるのまぶしく

体験を基に随筆を書こう

○「随筆」とは？

身近に起こったこと、見たことや聞いたこと、経験したことなどを描写しながら、感想や自分にとっての意味などをまとめた文章

○目的と相手・・・自分の体験や思いをクラスの友達に伝える

○作文を推敲し、「随筆」を書く

【推敲のポイント】

① 体験をより詳しく思い出す

② 体験の意味を見つめ直す(意味づけ)

③ 構成を考える

④ 書き出しを工夫する(教科書222ページ)

⑤ 表現技法(教科書224、226ページ)

【推敲例】

小学校六年生のとき、卒業式の後に友達と自転車で行った。小学校最後の思い出を作るために二人で海に行こうと前から約束していたのだ。砂浜を走ったり、砂に木の枝で絵を描いたりして時間を忘れて夢中で遊んだ。気がつくとき西の空が赤く染まっていた。夕日が海に沈んでいくところだった。二人でその様子を黙って見ていた。あんなにきれいな夕日を見たのは初めてだったので、今でも心に残っている。

随筆 題「夕日」

空を真っ赤に染め、海に一本の光の道を作りながら沈んでいく夕日。打ち寄せる波の音と鼻をくすぐる潮の香り。そして、まっすぐに夕日を見つめている友達の横顔。それが僕の忘れられない風景だ。

小学校を卒業した日、僕は小学校最後の思い出を作るために、友達と二人で自転車で海辺へ行った。その友達とは同じ中学校に進学することになっていたのだ。これが最後というわけではなかったが、「小学校での思い出」を作りたいと思ったのだ。砂浜を走ったり、砂に絵を描いたり、中学校でやってみたいことを話したり……あつという間に時間は過ぎ、気がつくとき夕日が海に沈んでいくところだった。その風景は言葉を失うほど美しく、僕たちの永遠の友情を応援してくれているように思えた。

あれから何度も同じ場所でも夕日を見ている。でも、あの日の夕日ほどまぶしく感じられたことはない。



